

活動報告書

報告者氏名:小倉 三千子

所属:東京都北区立豊川小学校

記録日:2015年 2月27日

【対象児の情報】

・学年 特別支援学級 小学1年生の男児:A児

・障害名 自閉症

・障害と困難の内容

親しげに話をしてくれるが、話が一方的で相手の質問への受け答えが苦手。双方向の会話がうまくいかない。

【活動目的】

・当初のねらい

学校でがんばっている自分の姿や、楽しかった事の写真を見ながら伝える経験を積むことで、身近な人(担任や母親)との会話を楽しみ、基礎的な表現力(話す・書く)を高める。

・実施期間

2014年4月から2015年2月

・実施者

小倉 三千子 ・ 対象児の母親

・実施者と対象児の関係

担任 ・ 保護者

【活動内容と対象児の変化】

・対象児の事前の状況

対象児は特別支援学級の1年生。入学時に、ひらがなの読み書きはできた。人に対する興味は強く、自分から親しげに話をしてくれるが、話が一方的で相手の質問とは関係のない受け答えをすることが多かった。会話が続かなかつたり自分の気持ちを言葉で伝えることが苦手だったりする様子が見られた。

・活動の具体的内容

① 「iPadでパシャッとひとこと写真日記」

学校で楽しかったことやがんばった自分の写真に、児童が日付やひとことを書き込み、「写真日記」を作成する。使用する写真はほとんどの場合、iPadで担任が撮った。学校で写真を見ながら担任と会話をし、日記帳に作成した「写真日記」を貼り付けて家へ持ち帰り、家庭でもそれを見せながら母親と会話をする。

「写真日記」を作成することが目的ではなく、それを見ながら担任や家の人と会話することに重点をおく。その際、必ず写真を見て分かる情報に関して支援者が「共感し、ほめ、質問する」→児童が「答える」という流れをおさえる。

使用アプリについて（QBプレゼン）・活用方法

子どものためのプレゼンテーションアプリ。支援学級の低学年の「写真日記」の実践では、プレゼンストーリーを作るというより、写真付きのワークシートを手軽に作成する時に活用した。目的に合った写真を取りこみ、写真の大きさを調整して余白を作ってプリントし、その余白に直接鉛筆で日付や言葉を書き込ませた。iPad上で、手書きで線や文字を書くことも可能。写真付きのワークシートがあると、その時の自分を瞬時に想起することができ、「話したい・書きたい」という意欲が高まることが観察された。書く力がついてきたら、写真を見ながら担任と会話をし、その内容を日記帳やマス目用紙に書くという活動に発展させた。



使用アプリについて（カメラ絵日記）・活用方法

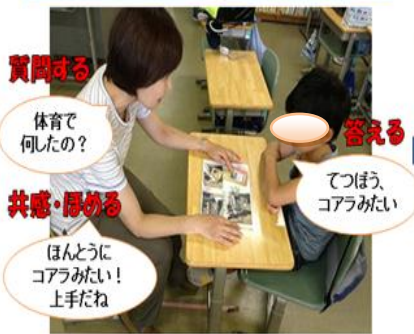
撮った写真を1枚取り込み、手書きで絵や文字を書くことができる。モードを切り替えると、テキスト入力もできるのが特徴である。「写真日記」を短時間で作成したい時や、指先で線や文字を書くのが不得意な児童に活用した。植物の観察記録や、図工で作った作品のひとこと紹介など、教科の学習場面でも活用できる。



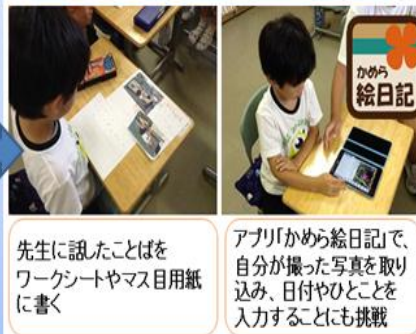
担任⇔Aくん⇔母親 写真日記の取り組み

学校で

①写真を見ながら先生と会話をする



②日付やひとことを書く(入力する)

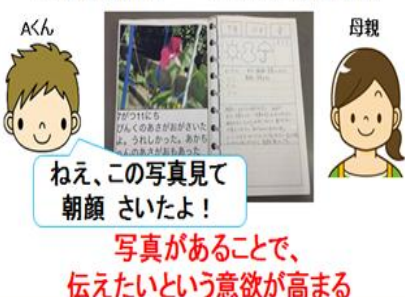


③できた写真日記を先生に見せて会話をする

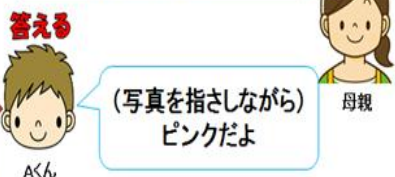


家庭で

家で写真日記を見せながら、家の人と会話をする
こんな会話が…(母親の報告より)



へえー、朝顔 咲いたんだね 何色だったの？



写真という情報を共有することで、話題をそらさず質問に答えることができる

きれいだね 字もとても上手 また、学校のこと教えてね



写真を見ながら伝えることで、自分の思いが伝わり、会話を楽しむことができる

② 「Skypeで青森にいるAくんとお話しよう」

10月から約1か月半、対象児が青森の祖母宅で過ごすことになり、学校を欠席した。遠く離れてはいるが、顔を見ながらの会話を試みたかったので、Skypeのビデオ通話を活用した。毎週1回の全5回、朝の会の時間帯にクラスの友達や先生の質問に答えるかたちで会話をした。



・対象児の事後の変化

① 「iPadでパシャッとひとこと写真日記」

写真があることで、伝えたいという意欲が高まり、母親からの報告によると、家に帰るとすぐに母親に日記帳を見せ、「お母さん、今日学校でね・・・」と話す姿が見られた。学校でも、教師との一問一答が続くようになってきた。写真日記に書く内容も、はじめは担任が書いた言葉や文をなぞって書くだけだったが、支援を受けながらその時の自分の気持ちまで書くことができるようになってきた。

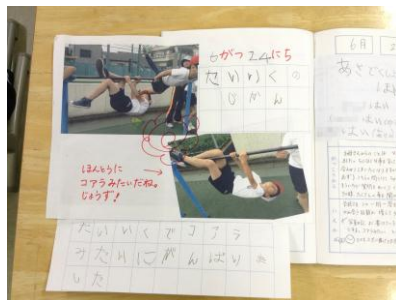
② 「Skypeで青森にいるAくんとお話しよう」

A児は、マスクをしている友達の姿を見て「あれっ、〇〇君風邪ひいたの？」など相手の顔が見えるSkypeならではの会話ができる。長期の欠席だったが、クラスの友達や担任とのつながりを絶やすことなくコミュニケーションができた。

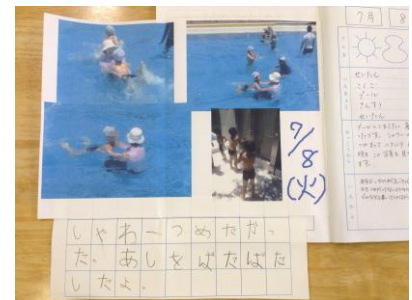
A児の写真日記



写真を見ながら担任と一問一答をする。担任が書いた文字をなぞった写真日記。



体育でがんばったことを、担任に話す。その言葉を自分で書いた写真日記。



「シャワーがつめたかった」と感想も話した。だんだん書く文章が増えていった。



支援学級の代表として全校児童の前で話すA児。「みんなのまえでおはなしできて、うれしかった」と自分の気持ちを担任に話し、長文の日記を書く。家庭でも、たくさんほめてもらった。



楽しかった全校遠足の写真日記。遠足の振り返りをした時「ながいすべりだい、たのしかったね」と担任との会話ははずんだ。

【報告者の気づきとエビデンス】

・主観的気づき

- ・写真日記を活用し、A児⇄担任・A児⇄母親の会話の場を意図的に設け、写真で情報の共有をしたことが双方向の会話力の向上につながったのではないか。
- ・A児へは、「はっきりと聞こえる声で」「本人が理解できる言葉を選んで」伝えることが、双方向の会話にとって必要ではないか。

・気づきに関するエビデンス

i Pad を活用した「写真日記」は三者（子ども 保護者 教師）を結ぶコミュニケーションツール

・写真日記をはさんで対面し、一問一答の学習を積み重ねていくうちにA児との日常会話がスムーズにいくことが増えた。母親からも、「写真日記で学校の様子もよく分かるし、学校の事を質問するとちゃんと答えが返ってくることも多くなった」と報告があった。写真日記が、A児との双方向の会話力の向上だけでなく、子どもと保護者と担任の三者を結ぶコミュニケーションツールにもなっている。アナログ(鉛筆で書く)とデジタル(写真)のよさを生かした「写真日記」が、親子の会話を豊かにしたことは、担任としてとてもうれしいことだった。

「写真日記」は自信や意欲をもって話したり書いたりすることを支える

・「写真日記」に載せる写真は、担任が見とった「A児のよさ」や「A児が学校でがんばっている姿」である。その写真を見ることで、A児は客観的に自分の姿を確認することになる。写真を見た時のA児は、恥ずかしそうな満足げな笑顔だ。そして、担任や母親と写真を見ながら会話をする中で、「よくがんばったね。すごいね。」という褒め言葉をたくさん聞くことになる。特別支援学級の児童にとって、自分に自信をもって一步一步学習し、先生や親がそれを応援することはとても大切なことだ。A児にとって、「写真日記」が自信や意欲をもって話したり書いたりすることを支える一つの手立てともなり、自己肯定感にもつながった。

会話とは「言葉のキャッチボール」

・約1か月半の間に、A児と学級の友達や担任がSkypeで、一問一答の会話をした。前71回のやりとりのうち、「今、雪降ってるの?」→A児「降ってるよ」など、受け答えが成立したのは51回だった。一方、「おはよう」→A児「やきいも食べたよ」など、ちぐはぐな受け答えは20回だった。担任の観察によると、A児がちぐはぐな受け答えをする時は、こちらからの声かA児に聞こえていないか、意味が理解できていないであろう場合がほとんどだった。まさに、会話とは「言葉のキャッチボール」。双方向の会話成立しない時は、相手が受け取ることのできるボールを投げるができなかったこちら側の話し方(発信の仕方)に工夫が足りなかったと考えるべきだということを再確認した。

会話をする人や人とつながることって 楽しい・心地よい

・A児とSkypeで話すことを支援学級の児童は毎回とても楽しみにしていた。「今日はAくんとSkypeでお話する日です」と伝えると、「やったあ!私、今日はAくんに聞きたいことがある」という児童もいた。ICTだからこそ、離れた友達とも顔を見ながら話することができる、人とつながることは楽しくて心地よいものだという経験を、A児だけでなく、支援学級の児童全員が味わうことができたのは、大きな成果であった。